

授業づくり

誰もがわかって楽しむために、段階的に取り組まれていて、とても勉強になりました。空間認識、身体の感覚など難しい課題が多かったですが1つひとつ丁寧に取り組み、子どもたちが考え、わかっていく課程があり、とても面白かったです。保育にもつながると思うので、明日からの保育に活かしていきたいと思いました。

ねこちゃん体操について、側転についてわかりやすくかつコンパクトにまとめられていてとてもよかったです。バスケットももう少し短くわかりやすく絞り込んだ方が良いかなと思っています。ねこちゃん体操の補助の仕方やつまずきのポイントなど画像などで伝えられたらさらに授業に生きると感じました。

ロンダートするときの手の位置・向きが勉強になりました。

市川先生 牧野先生 佐々木先生のお話を聞かせていただいて、実践してみたいとおもいました。側転や前回りなどどうしても一つ一つ教えていくが多かったので牧野先生がお話ししていただいた順番にマット指導を行うことで身体に染みついて出来るようになっていくんだなと思いました。また保育園に持ち帰りして行きたいと思います。

ねこちゃん体操や側転については、何度か講義を聞かせていただいたことがありますが、聞けば聞くほど細かいところまで理解することができ、大変勉強になりました。バスケットについては、私自身指導したことがなく、ボール運動も苦手なので、空間認知を私が認知できるのかなと心配な点がありましたが、とても参考になりました。授業では、ゲーム以外にシュート調査やパスからのシュートの練習などありましたが、ゲーム以外でドリルゲーム的なものなどがあれば教えてください。ありがとうございました。

「ねこちゃん体操」「マット運動」「バスケットボール」とそれぞれとても分かりやすく解説されていて、なるほどと思うところがたくさんありました。「ねこちゃん体操」には、全校で取り組んでいるのですが、形だけのものになっているクラスが多く、その重要性がしっかりと認識されていないと思うところがあるので(自分の説明不足もあると思うのですが...)、もう一度、しっかりとできている子と苦手としている子の違いをタブレットの動画を活用して児童同士で見つけさせ、考えていけたらと思います。「側転」につながる動きが、低学年からでもできそうだと今回の実践紹介を見て感じたので、取り組んでみたいと思いました。「バスケットボール」の実践を見て、改めて児童から出てくる躓きをしっかりと予想しておくことが大切だと思いました。空間認識を教えるのではなく、見つけさせ、体験させ、得点を取ることができた喜びを、どの児童にも体験させてあげたいので、誰にでもできるようになる授業づくりをしていかなければならない(スポーツが得意な子だけが活躍する授業にならないように)と思いました。今日は、貴重な授業実践を聞くことができ、とても勉強になりました。ありがとうございました。

同志会で大切にされてきた教材や指導方法を、理論的なところも含めて、しっかりと学んでいくことの重要性を感じました。

改めて、同志会の先生の話は、わかりやすく、したくなるお話でした。実践をしてなくても、してる気分になり、身体の中で、あんな実践してみたいという思いが湧いてきました。子どもたちとともに考えあう時間

や空間を柱にした実践だと思いました。 保育園でもできる、ねこちゃん体操、マット運動、動物マット、そして、空間認識を養うあそびをしたいと思いました。 ステキな分科会ありがとうございました😊

陸上運動

感想でも言ったように、サーキット的教材のねらいや価値については、どのように子どもを引きつけるのか？ と言うこととは別に検討しなくてはいけないのかなと思いました。

入門提案について 同志会が陸上運動について丁寧にまとめられていて、とても勉強になりました。リレーについて、多くの実践（同志会以外も）では「バトンパス」の理論や技術習得に目を向けられていますが、一方で「リレーの歴史」に目を向けると「長距離リレー」も大切な学習内容だと考えています。リレーの新しい文化をつくっていく必要があると思いました。 実践提案について 子どもたちの実態からつくっていく実践、午前中の上野山先生の子どもたちの「意見表明権」とつながるものだと思います。その中で、教材の価値、陸上運動との繋がり、発展について考えていく必要があると思います。

同志会が陸上運動教材をどのように捉えているのか、説明できるように勉強していきたいと思います。

梅山さんの入門提案は、コロナの中でさらに同志会の体育が光り輝くなと思いました。 芝田さんの「魔界からの挑戦状」は何から何までネーミングが素晴らしい！子どもたちが惹きつけられたらいいことが、よくわかります。 支援の子たちは、まず楽しそう！とならなければ文化の入り口にも立とうとしないので、素晴らしい実践だと思います。

支援学級での楽しい実践ありがとうございました。 私の学校は学習支援に特化してしまって、なかなかこのような支援学級独自の実践ができないですが、 体育の苦手な子（先生も）が楽しめるっていいなと思いました。 なんとか私もやってみたいなと思いました。 ネーミングセンスがいい！

運動文化は？陸上教材としての中身は？何をさせたいの？何の力がつくの？などについては、泉州でも議論になっていました。 サーキットって一体...？ということについては、以前、辻内さんが部主事として職場の方に配布されていた体育についてのプリントに書かれていたことがありました。 サーキットだと、視覚的に、どのような運動をするのかということがすぐに理解されやすく、障害児に適しているといった内容でした。もちろん内容の精査については言うまでもなく必要ということも。 こだわりが強くすぐにルールを説明できない子どもたちにとっては必要な「教具」といった感じでしょうか？ 今回、芝田先生は短い時間の中で子どもたちに走ったり跳んだり投げたり、といった楽しさを味わってもらおうとされたのだと思います。そういう中ではやはりサーキットという選択がベストだったのかなと思いました。 安武先生や楠橋先生、岨さん、田中さんがいる...！と知って、その辺はやっぱり突っ込まれるよねえ～とっていました笑 体づくりという分科会だったらよかったですかね？笑

梅山先生、芝田先生ありがとうございました。子どもたちが楽しく学習を進めている様子がとても伝わってきました。 zoom 中でも言ったことですが、教師自身が楽しむことの大切さを再確認できた気がします。また、自分でもこの実践をやってみたいと思いました。そのためにも、今日皆さんが発言していたようにそれぞれの

競技の意義を考えていくことが必要になってくると思うのでまた考えていけたらと思います。

サーキットトレーニングにから中身があるのか？ということは、確かに考えました。未分化の低学年だはあるが認識を伴う学習を用意することが求めらることは言うまでもありません。ですから、最初この教材はどうなんやろ？と思う方があったのは否めません。子どもたちが楽しく、うまく走るようになってる姿を見て、きっとわかる、出来は中身があるはずだと、考え直し、この教材の価値をこれからしっかり考えたい、

芝田先生、報告ありがとうございました。子どもの実情に沿った実践をアイデアたっぷりに実践された様子がよくわかりました。今回の分科会で問題になっているサーキットの問題は、確かに同志会では（少なくとも多さ支部では）それほど論議されてきたものではないと思います。ただ、芝田先生が多分実践モデルの一つとされたのは、古川（奈良）先生の実践だと思えます。その前、前と辿っていくと、障がい走の実践があり、箱とび走や平面の障がい走というところに行きつくのではないかと思われまます。そのあたりに行くと「なぜ〇〇なのか？」という同志会のややうんちく臭い理論や考え方にぶち当たるので、そこをもう一回支部としても学び直す必要があるのかな、と思いました。

私の司会の不手際で、参加者全員のご意見を紹介できず、申し訳ありませんでした！ 実践提案後のご意見の中にもありましたが、子どもの楽しさと教材の持っている価値を教師(教師集団)が理解しておくことが必要だと改めて感じました。 研究授業で支援学級が授業をすると、教科指導が足りないという意見が出たり、また逆に学級担任が授業をすると、子ども観察が足りないという意見をよく耳にします。だからこそ、お互いの擦り合わせが大事になってくると思います。 子どもの「やりたくない！」「こわいから」という声は、支援に限らず、どの学級でも出てきます。そうした声をきちんと聞いて実践されている芝田さんの根気強さや、子どもを楽しませたい！という気迫が伝わり、楽しく聞かせてもらいました。 ありがとうございます。

陸上運動はともすれば、運動神経が良いからや持久走などでは根性論が子どもたちの中にありがちだと思います。そこに、分かってできるという科学的認識を持たせることに、同志会の陸上での学ぶ価値があると感じています。また、サーキットトレーニングの文化的背景は薄いとは思いますが、子どもが楽しんで運動をすることに何か魅力があるのだと思います。 楽しければ良いという訳ではないのですが、そこから学習を作っていくということも、ありなのかと思いました。

泉州で、この実践を始めるきっかけとなった奈良 B の古川実践では、低学年のグループ学習がどの程度可能なのか、陸上運動のみならず、全ての運動で必要となる基礎的な運動感覚を意識的に言語化してどの程度教え合えるのかといった実験的な観点も含まれていたように思います。今回は支援学級児童ということで、言語で友だちの良いところや上手くできるコツを教え合うことはできなかったようです。学ばせたい中身については、今後さらに検討が必要だと思いますが、低学年にとって身につけるべき基礎的な運動感覚とそれを含んだ課題設定とあり方。課題に取り組む中で、感覚的なコツを意識的に言語化して伝え合う手段など、今後整理して次の実践に繋げていければいいのかなと思いました。

障害児体育

・奥さんの基調提案。子どものことをじっくりみて、一人一人にあった授業をしようとする誠意がまぶしいです。周りの先生にもその気持ちをもっとあったらよいのに。厳しい職場状況でも、きちんと意見を表明し、実践できるところから進めていく姿勢に胸が打たれます。

・入門提案では、障がいの捉え方や子どもの本当の要求を捉えることの大切さを学ばせていただきました。実践提案では、みんなでシュートという教材を学びました。ほんとに斬新で面白くて、どの子ども楽しんで参加している姿が印象的でした。教えたことを明確にさせて、オリジナル教材を創っていくことで子どもたちの要求を叶えることできるんだろうなと思いました。

お二方の実践について、とても分かりやすい資料と映像で、大切にされていることや取り組みがわかりやすかったです。奥先生の実践から、好きなこと、得意なことをたっぷりと経験させたい、という「たっぷり」ということの意味が映像を通して理解できました。その間、子どもたちの反応や筋肉の動き、姿勢などを感じ取りながら子どもたちと取り組まれているんだなと思いました。辻内先生の実践では、子どもたちの姿を映像を繰り返しながらい、見てほしい子どもの姿を教えてもらい、なぜ動き出せたのか、など知りたいと思いました。途中で抜けてしまい、そのあたりをお話されたのではないかと思います、質問ができませんでしたが、また私自身でも勉強していきたいと思いました。始めて同志会の障害児体育分科会に参加させていただいて、やはりよい学びができました。ありがとうございました。

入門提案の「スリッパ」のくだり（3歳、4歳、5歳）はなるほど～と勉強になりました。それぞれの子どもに合わせた関わりを実践されている姿が良いなと感じました。とても大切なことですね。こどものえがおに表れていたなと感じました。辻内先生の実践も保育の現場でも楽しめそうだなと思いながらみていました。形だけをおしえるのではなく、目の前の子どもたちを見ながら実践されていることがよくわかり勉強になりました。

まず、子どもの得意なこと（好きなこと）を知り、子どもを理解していくことがとても大切だと気づかれました。細かな子どもの行動も日頃からしっかり見ていかないとかなの感じました。その子にあった支援や声掛けを心掛けていきたいです。

奥先生、辻内先生の報告、とてもわかりやすかったです。子どもによってハマる（興味を持つ）ものがちがうからこそ、何がいいのか子どもの生活や思いを知って取り組むことの大切さを改めて学びました。また、辻内先生の実践、支援学級の体育の時間にやってみたいと思いました。ありがとうございました。

奥さんの入門提案プレゼンについて。提案集のテキストを補完して、担当している児童との微笑ましいやり取りが生き生きと伝わってくる素晴らしいものでした。バランスボールランポリンやドーナツ型キャスターボードでの児童の表情が印象的でした。また「発達には『できる』だけじゃない→タテの発達、ヨコの発達」の模式図はとてもわかりやすく、勤務校での職員の障害理解研修で使いたいと思いました。ありがとうございました。

入門提案では、支援学校や障害児教育をめぐる現状について非常に分かりやすくまとめられていました。支

援学校でも GIGA スクールが進んでいて驚きました。また、学校内の子どもの過密過大も非常に問題だなと感じました。 そんな大変なかで、提案した奥先生の体育実践は目の前の子どもをよく見て、子どもの笑顔が見たいという純粋な気持ちで、既存の体育にとられない実践をされていて素晴らしいと思いました。できる・できないという表面的な捉え方ではなく、子どもの背景や願いをくみ取る力が教師には必要だとあらためて考えさせられました。 実践報告では、はじめて辻内先生の直近の実践が聴けました。10年ぶりの体育実践ということでしたが、子どもたちがイキイキと取り組み、先生のこだわりも感じられる実践でした。遊びとゲームをつなぐ、という視点を持って、ボールゲームの醍醐味であるシュートに特化した内容は見ている側も「やってみたい！」という授業でした。ゴールも工夫次第で、多くの子どもたちが「分かってできる」につながり、意欲的に参加できるものになると感じました。今後もこの実践の発展や幅が広がっていくことに期待します。

奥先生の基調提案は素晴らしかった。流石だなあと感じました。教員2年目であの提案の力はすごい。あと、実践紹介の中では見えなかったですが、バランスボールの時も、ドーナツ型キャスターボードの時にも、子どもの先生は子どもの背中側ばかりだったので、対面することも半分以上あればと思ってます。奥先生ならやっていると思ったけどね。辻内先生の実践提案も面白かった。特にパート2のゴールの工夫は面白かった。論議の中であったあそびとゲームのつながりの説明は難しかったし、障害児体育の子どもたちや幼年の子どもを考えるとちょっと合わないかあと感じました。あそびの定義としては勝ち負けがあることもポイントの一つですが。この提案のところは、先生の担いでいるゴールを追いかけていれる。邪魔をする先生を交わしてシュートするという先生との対戦の勝ち負けです。それがルールが増えたり、対戦チームとの勝ち負けが入ることで一気にゲームに繋がるのではないのでしょうか。感想でも述べましたがパート2のゴールであれば一気にゲームに近づけられる可能性を感じました。その発展が遊びからゲームへのつながりのレベルだと感じました。

奥先生の入門提案は、障害児教育における教育情勢や課題、ヴィゴツキーの理論と自分の実践の往還が整理されとても分かりやすく素晴らしいと思いました。とりわけ、コロナ禍における教育の不自由さに対して、嘆いているばかりでなく、学校に働きかけ自分の実践に取り組みまれたところに若い力と教育の希望を感じました。最後の糸賀氏の言葉の紹介で改めて障害児教育の原点をできたのと、それを同志会の理念と結びつけるとは、本当に練られた入門提案で感心しました。 辻内先生の実践提案は、今までの研究実践の積み重ねを土台にして新しい挑戦をされていることに頭が下がります。集団で取り組むので、学年の合意が大切だと思うのですが、そのあたり、学年での子ども理解、障害理解を共有し、学年の先生と一緒に実践を創り上げていくのは辻内先生の実践の真骨頂だと思いました。どうもありがとうございました。

奥先生のなつきちゃんの実践は、好きな運動をたっぷりくぐらせたいと、活動内容を大きく変更されたことに感心しました。この子にとってこうしたら伸びるだろうけど、と思いながら、周りに気を遣ってなかなかできない.. 私自身の反省です.. 辻内先生の実践もいつも子どもが輝く取り組みで、素晴らしい！初めての小学部で、また、新鮮な姿でした。ありがとうございました<(_ _)>

分かりやすいお話ありがとうございました。うちの保育園は週に一回、配慮の必要な子ども達が集まって小集団保育をしています。11月から担当になるので、すごく勉強になりました。子ども達がどこで困っているか、怖いと思っているかを掴み、どこにおもしろさを感じるかを探るのは私も大切に保育していきたいと思えます。ありがとうございました。